

王安石の詩における唐詩の受容について

湯 浅 陽 子

【要旨】

北宋・王安石は若年期から唐代詩人の作品を好み、二種の詞華集と杜甫の詩集を編纂しているが、その背景には北宋中期に唐代詩文のテクストが諸人によって再発見され、整理されていった状況が存在している。王安石は特に杜甫の、森羅万象の様態を捉えその生成の機微に踏み込もうする迫力を高く評価していた。また儒教的倫理性を重視する風潮の中にある王安石ら北宋期の士大夫たちの杜甫愛好は、その詩風のみならず、杜甫の儒教的志向に注目したものであったと考えられる。また晩年の王安石の詩には、杜甫ら先行詩人の詩句を剽窃的に使用した例があり、また多くの「集句」詩も制作されているが、これは先行詩句の剽窃的使用を極限にまで進めたものと考えられる。古人の作品を味読することを通じて、詩句そのものの剽窃を超えた新しい表現を模索するような詩作態度は、後の江西詩派の掲げる「奪胎換骨」的手法の先駆と考えることができるのではないだろうか。

はじめに

北宋・王安石（一〇二一～一〇八六 字介甫 封荊國公）の詩について、三世代ほど下になる陳師道（一〇五三～一一〇一）の『後山詩話』（清・何文煥輯『歷代詩話』北京中華書局 一九八一年 所収本）は、次のように評している。

荊公詩云、「力去陳言誇末俗、可憐無補費精神。」而公平生文體數變、

暮年詩益工、用意益苦、故知言不可慎也。

荊公の詩に云ふ、「力めて陳言を去り末俗に誇る、憐むべし精神を費すを補ふ無きを」と。而るに公 平生 文體數しば變じ、暮年詩益ます工みにして、意を用ふること益ます苦だし、故に言は慎むべからざるなりと知れり。

また『後山詩話』は、黃庭堅（一〇四五～一一〇五）の言葉として、

魯直謂荊公之詩、暮年方妙、然格高而體下。

魯直謂へらく荊公の詩は、暮年方に妙なり、然るに格は高けれども體は下れり。

とも記している。いずれの批評も、王安石の詩風が時と共に変化すると捉え、特に晩年の作品を評価している点では共通しているものの、陳師道は晩年の作品の巧みさが意識的になされたものであるとし、また黃庭堅は優れていても詩の「體」（スタイル）としては劣っていると、それぞれ保留を付けている。周知の通り陳師道・黃庭堅はともに蘇軾（一一〇三～一一〇一）の門人であり、蘇軾と対立関係にあった王安石について手放しで褒めることは憚られたのかもしれない。しかし彼らは王安石の詩を留保付きながらある程度評価しており、蘇軾の門人たちのあいだでも、王安石の詩に対して一定の評価が与えられていたと考えてよいだろう。そこで本稿では、このような王安石の詩風の形成について唐詩の受容という点から検討し、その背後に存在している北宋中期にお

ける唐代詩文テキストの整備と唐詩の受容などの状況との関わりについて考察してみたい。

一 若年期の唐詩学習

王安石がすでに若年期から唐代詩人の作品を好み、それに学ぼうとしていたことについて、南宋・葉夢得（一〇七七—一一四八）『石林詩話』巻中（歴代詩話本）は次のように述べている。

王荊公少以意氣自許、故詩語惟其所向、不復更爲涵蓄。如「天下蒼生待霖雨、不知龍向此中蟠」、又「濃綠萬枝紅一點、動人春色不須多」、「平治險穢非無力、潤澤焦枯是有材」之類、皆直道其胸中事。後爲羣牧判官、從宋次道盡假唐人詩集、博觀而約取、晚年始盡深婉不迫之趣。乃知文字雖工拙有定限、然亦必視初壯。雖此公、方其未至時、亦不能力強而遽至也。

王荊公 少くして意氣を以て自ら許す、故に詩語は惟だ其の向かふ所のみにして、復た更に涵蓄を爲さず。「天下の蒼生 霖雨を待ち、知らず龍の向に此中に蟠るを」、又た「濃緑の萬枝 紅一點、人を動かす春色は多きを須ひず」、「平治 險穢 力無きに非ず、潤澤 焦枯 是れ材有り」の類の如きは、皆な直だに其の胸中の事を道ふ。後に羣牧判官と爲り、宋次道より盡く唐人詩集を假り、博觀して約取し、晩年にして始めて深婉にして迫らざるの趣を盡せり。乃ち知る 文字は工拙に定限有りと雖も、然るに亦た必ず視て初めて壯んなりと。此の公と雖も、其の未だ至らざる時に方りては、亦た力強して遽やかに至すこと能はざるなり。

ここで葉夢得はまず、若年期の王安石（荊公）の詩風が、自分の気概

に對する自信を反映して、ただ心のうちにあるものを表現するだけで含みのある表現をしないものであったと述べ、その例として三つの對句を挙げている。初めに挙げられている「天下蒼生待霖雨、不知龍向此中蟠」は、「龍泉寺石井二首」其一（臨川集卷三十三）の軋結句であるが、この連作詩は『石林詩話』の記述のみならず、現代の劉乃昌氏・高洪奎氏『王安石詩文編年選釋』（山東教育出版社 一九九二年）においても、「讀書心拳時期」の作と考えられている。そこでまず王安石の若年期の詩風について、この連作詩二首を例として検討したい。

山腰石有千年潤 山腰 石 千年の潤ひ有り
海眼泉無一日乾 海眼 泉 一日の乾くこと無し
天下蒼生待霖雨 天下の蒼生は霖雨を待つも
不知龍向此中蟠 龍の向に此中に蟠るを知らず

（其一）

人傳秋水未嘗枯 人傳ふ 秋水は未だ嘗て枯れずと
滿底蒼苔亂髮麤 滿底の蒼苔は髪を亂して麤し
四海旱多霖雨少 四海 旱多く霖雨少なし
此中端有臥龍無 此中 端に臥龍有りや無きや

（其二）

両詩は寺院の石組みの井戸に寄せられており、まず其一では、千年もの間うるおいを保ち続けている石と、一日も涸れることのない泉を描き、そこから雨を降らせる龍が人知れず泉の中にとぐるを巻いている様子进行像している。また其二は、泉の底一面に青い水草が乱れた髪のように生い茂っている様を見、近頃の日照り続きを意識して、このなかに本来に龍がいるのだろうかと言ってみせている。二首の内容はともに、滾々と沸き出す泉を目にしてその底に潜む龍の存否を想像するものであり、

そこには若年の作者が不可思議な力を秘めた存在に向けた好奇心や想像力が、素直に表現されている。

ところでこの連作詩について李壁注(巻四十七)では、其一の承句は杜甫「石笋行」(杜詩詳注巻十)の「古來相傳是海眼、苔蘚蝕盡波濤痕。(古來相ひ傳ふ是れ海眼なりと、苔蘚 波濤の痕を蝕盡す。)」を、結句は李白「魯郡堯祠送寶明府薄華還西京」(李太白全集巻十六)の「深沈百丈洞海底、那知不有蛟龍蟠。(深く沈むこと百丈 洞海の底、那んぞ知らん蛟龍の蟠る有らざるを。)」をそれぞれ踏まえ、また其二の「滿底蒼苔亂髮麤」は杜牧の「水流苔髮直(水流れ苔髮は直なり)」(該当作品未詳。)を、「此中端有臥龍無」は、韓愈「峽石西泉」(韓昌黎詩繫年集釋巻七)の「聞説早時求得雨、祇疑科斗是蛟龍。(聞説らく 早時 求めて雨を得と、祇だ疑ふ 科斗は是れ蛟龍なるかと。)」を踏まえると指摘している。この詩の表現がこれらの唐詩の詩句を踏まえているということからは、若年期の王安石が盛・中・晩の三期に渡る唐詩をよく読んでいた様子が窺われるだろう。

ところで先に挙げた『石林詩話』の記事のなかに、「後爲羣牧判官、從宋次道盡假唐人詩集、博觀而約取、晚年始盡深婉不迫之趣。(後に羣牧判官と爲り、宋次道より盡く唐人詩集を假り、博觀して約取し、晩年始めて深婉不迫の趣を盡くす。)」という記述があり、葉夢得は、王安石の詩風に変化を与える契機となったのは、「羣牧判官」時代に宋敏求(字次道 一〇一九〜一〇七九)から唐人の詩集を借りてこれを広く学んだことであると考え、またさらに、この時の変化の結果、王安石の詩が遂に晩年に至って「深婉不迫」(奥ゆかしくたおやかでおっとりしていること)の趣を得たとも考えていた。王安石が羣牧司判官となったのは仁宗至和元年(一〇五四)、三十四歳の時のことであり、彼は嘉祐

元年(一九五六)十二月に提點府界諸縣鎮公事に移るまで、足かけ三年の間この職に在ったが、『石林詩話』の言うところに従えば、この間に同僚であった宋敏求から借りて読んだ唐人の詩集が、彼の詩風の形成に大きな影響を与えたとはいえる。

『宋史』巻二百九十一(中華書局本)によると、宋敏求は趙州平棘(現河北省)の人で、仁宗期に兵部尚書兼參知政事であった宋綬(九九一〜一〇四一)の子であり、寶元二年(一〇三九)に進士出身を賜り館閣校勘となっている。またその後、王堯臣らが『新唐書』を編纂する際には、唐代の故事についての博識さを評価されて『新唐書』の編修官となり、さらに神宗期には史館修撰として『兩朝(仁宗・英宗朝)正史』の編纂に当たる等、度々史書編纂のスタッフとなっており、史学への造詣の深さを窺わせる。また同じ伝中には彼の個人蔵書について、次のようにも記されている。

敏求家藏書三萬卷、皆略誦習、熟於朝廷典故、士大夫疑議、必就正焉。補唐武宗以下『六世實錄』百四十八卷、它所著書甚多、學者多咨之。

敏求 書三萬卷を家藏し、皆な略ぼ誦習し、朝廷典故に熟し、士大夫の疑議、必ず就ち正す。唐武宗以下『六世實錄』百四十八卷を補ひ、它の著す所の書は甚だ多く、學ぶ者は多く之に咨る。^{はか}

この記事によると、宋敏求は当時としては群を抜いた三萬卷の蔵書を持ち、その多くを誦んじていたということであり、幾度も史書編纂のスタッフとなった彼の豊かな学識は、この蔵書を基盤にしたものであったようだ。さらに彼はまたこの豊かな家蔵書を広く貸し出してもいたらしく、このことについては宋・朱弁(？〜一一四四)『曲洧舊聞』巻四(學津討源本)に次のように記されている。

宋（次道）居春明坊。昭陵時、士大夫喜讀書者多居其側、以便於借置故也。當時春明宅子比他處僦值常高一倍。陳叔易常爲子言此事、嘆曰、「此風豈可復見耶。」

宋（次道）春明坊に居す。昭陵の時、士大夫の讀書を喜ぶ者多、其の側らに居するは、借置に便なるを以ての故なり。當時春明の宅子は他處に比して僦值常に一倍高し。陳叔易 常に子の爲に此の事を言ひ、嘆じて曰く、「此の風は豈に復た見るべきや」と。

文中の「昭陵時」は、没後永昭陵に葬られた仁宗の在位期（一〇二二～一〇六三）を指すと考えられるが、当時、宋敏求の蔵書を借りたい者が多いために、近隣の家賃が値上がりすることさえあったという。北宋期の士大夫層の讀書は、必ずしも自己の蔵書のみによるものではなく、このような蔵書家からの借用にも依存していたようだが、先に見た『石林詩話』の文中に登場した、王安石が借り受けた唐人の詩集も、宋敏求が行っていたこのような蔵書貸し出しのひとつであったのだろう。

ところで宋敏求から唐人の詩集を借りた王安石は、これらの詩集を読んだ後、『唐百家詩選』という詞華集を編集しており、その経緯について「唐百家詩選序」（臨川集卷八十四）に次のように記している。

余與宋次道同爲三司判官時、次道出其家藏唐詩百餘編、誘余擇其精者。次道因名曰、『百家詩選』。廢日力於此、良可悔也。雖然、欲知唐詩者、觀此足矣。

余と宋次道と同一三司判官爲りし時、次道 其の家藏の唐詩百餘編を出だし、余に其の精なる者を選ぶを誘ふ。次道 因りて名づけて曰く、『百家詩選』と。日に此に力むるを廢するは、良に悔ゆべきなり。然りと雖も、唐詩を知らんと欲する者は、此を觀れば足らん。すでに検討したように、若年期の王安石の詩には、すでに李白・杜甫・

韓愈、或いは晩唐の詩人の作品に学んだ表現を指摘することができたが、この時彼が宋敏求から唐人詩集百余編を借りたことには、その唐詩学習をさらに進めようとする意図があったのではないだろうか。また、王安石が唐詩に興味を持っていることを知っていたからこそ、書物を貸し出す側の宋敏求も、唐詩のなから精華を選び出して選集を編むことを薦めたのかもしれない。

この『唐百家詩選』は、『宋史』卷二百九藝文志八集部總集類に二十卷本として著録され、同じ巻数で四庫全書集部總集類に収められている。宋代の記録としては、南宋・晁公武（生卒年未詳。紹興二年（一一三二）進士。『郡齋讀書志』卷二十總集類に、凡一千二百四十六首を集めた二十卷本とする著録があるが、ここでは宋敏求が編し、その上に王安石が取捨を加えたとされている。また南宋・嚴羽（生卒年未詳）『滄浪詩話』「考証」（歷代詩話本）は、この選集について次のように批評している。

王荊公『百家詩選』、蓋本於唐人『英靈間氣集』、其初明皇・德宗・薛稷・劉希夷・韋述之詩、無少增損、次序亦同。孟浩然止增其數。儲光羲後、方是荊公自去取。前卷讀之盡佳、非其選擇之精、蓋盛唐人詩無不可觀者。至於大曆以後、其去取深不滿人意。況唐人如沈・宋・王・楊・盧・駱・陳拾遺・張燕公・張曲江・賈至・王維・獨狐及・韋應物・孫逖・祖詠・劉昫虛・綦母潛・劉長卿・李長吉諸公、皆大名家。李杜韓柳以家有其集、故不載。而此集無之。荊公當時所選、當據宋次道之所有耳。其序乃言、「觀唐詩者、觀此足矣。」豈不誣哉。今人但以荊公所選、斂衽而莫敢議、可歎也。

王荊公『百家詩選』は、蓋し唐人の『英靈間氣集』に本づかん、其の初 明皇・德宗・薛稷・劉希夷・韋述の詩は、少も増損無く、次序も亦た同じなり。孟浩然是止だ其の數を増すのみ。儲光羲の後は、

方にはれ荆公自ら去取す。前卷は之を讀むに盡く住きも、其の選擇の精なるに非ず、蓋し盛唐の人の詩は觀るべからざる者無からん。大曆以後に至りては、其の去取 深く人意に滿たず。況んや唐人の沈・宋・王・楊・盧・盧・駱・陳拾遺・張燕公・張曲江・賈至・王維・獨孤及・韋應物・孫逖・祖詠・劉昫虚・綦母潛・劉長卿・李長吉諸公の如きは、皆な大名家人なり。李・杜・韓・柳は家に其の集有るを以て、故に載せず。而して此の集に之無し。荆公の當時選ぶ所は、當に宋次道の有する所に據るのみなるべし。其の序に乃ち「唐詩を觀んとする者は、此を觀れば足らん。」と言ふは、豈に誣ならずや。今人は但だ荆公の選ぶ所なるを以て、斂枉して敢へて議する莫し、歎くべきなり。

嚴羽はこの選集の、特に王安石自身が詩を選んだと考える部分の選択方法について批判的な態度を取っているのだが、ここで彼が『唐百家詩選』の基づくところと考えている『英靈間氣集』という唐人選唐詩集についてはよくわからない。あるいはこの書名は『英靈・間氣集』の意で、殷璠『河嶽英靈集』と高仲武『中興間氣集』を並列したものかとも考えることができようが、いずれも明皇（玄宗）・徳宗・薛稷・劉希夷・韋述の作品を収録しておらず、該当しないと思われる。既に佚した別の総集が存在したのだろうか。

また王安石は、この『唐百家選集』とは別に『四家詩選』という詞華集を編纂している。この『四家詩選』は、『宋史』卷二百九藝文志八集部總集類に十卷本として著録されているものの、既に佚しており、現在では見ることはできない。しかし、この選集に言及したいくつかの資料から、その概容を知ることが可能であり、例えば北宋・惠洪（一〇七一〜一一八一）『冷齋夜話』卷五（學津討源本）には次のように記されている。

舒王以李太白・杜少陵・韓退之・歐陽永叔詩編爲四家詩集、而以歐公居太白之上、世莫曉其意。舒王嘗曰、「太白詞語迅快、無疎脫處、然其識汚下、詩詞十句九句言婦人・酒耳。」

舒王 李太白・杜少陵・韓退之・歐陽永叔詩を以て編して四家詩集と爲し、而して歐公を以て太白の上に居せしむ、世 其の意を曉る莫し。舒王 嘗て曰く、「太白の詞語は迅快にして、疎脱する處無し、然るに其の識は汚下にして、詩詞十句の九句は婦人・酒を言ふのみ」と。

既に見た『唐百家詩選』とは別に、唐代の李白・杜甫・韓愈と当代の歐陽脩とを併せたこのような選集を編んでいることから、王安石が唐代の詩人のなかでも杜甫・李白・韓愈を別格として高く評価していたこと、また当代において彼らを継承する者として歐陽脩の詩に高い評価を与えていたことが読みとれるだろう。またこの四者の作品は、既に見た初期の詩作においても典拠とされていたものであり、王安石の詩作が早期から継続してこの四者の作品に多くを学んでいたことを示しているだろう。もっとも、王安石が歐陽脩の詩を李白の詩よりも高く評価することの可否については、惠洪以外の何人もの人物が意見を述べているが、それは暫く置くとしても、このような選集の存在は、少なくとも王安石がこの四者の詩を他から抜き出したものとして意識していたことを示しているだろう。

二 杜詩テクストの整理と杜詩の学習

また王安石は李白・杜甫・韓愈のなかでも特に杜甫の詩を好んだようである。末尾に皇祐四年（一〇五二 三十二歳）五月の日付の附された

「老杜詩後集序」（臨川集卷八十四）には、知鄞縣期（慶曆七年）皇祐元年（一〇四七）一〇四九）に、彼が他人から杜甫の佚詩二百餘首入手し、『老杜詩後集』を編んだ経緯が次のように記されている。

予考古之詩、尤愛杜甫氏作者。其辭所從出、一莫知窮極、而病未能學也。世所傳已多、計尚有遺落、思得其完而觀之。然每一篇出、自人知非人之所能爲而爲之者、惟其甫也、輒能辨之。予之令鄞、客有授予古之詩世所不傳者二百餘篇。觀之、予知非人之所能爲而爲之、實甫者其文與意之著也。然甫之詩、其完見於今者、自予得之。世之學者至乎甫而後爲詩、不能至、要之不知詩焉爾。嗚呼、詩其難惟有甫哉。

予 古の詩を考ふるに、尤も杜甫氏の作れる者を愛づ。其の辭の從り出づる所は、一に窮極を知る莫く、而して未だ能く學ばざるを病むなり。世に傳ふるところ已に多きも、計ふるに尚ほ遺落あり、其の完きを得て之を觀んと思ふ。然して毎に一篇出づるに、自然に人は人の能く爲す所に非ずして之を爲すと知れば、其れ甫ならんと惟ひ、輒ち能く之を辨ず。予の鄞に令たるや、客に予に古の詩の世に傳はらざる所の者二百餘篇を授くる有り。之を觀、予は人の能く爲す所に非ずして之を爲せるを知れり。實に甫なるは其の文と意の著しきなり。然るに甫の詩は、其の完く今に見るる者、予より之を得。世の學者は甫に至りて後に詩を爲り、至ること能はず、之を要するに詩を知らざるならん。嗚呼、詩 其れ難きは惟れ甫に有るなるか。三十二歳の王安石はこの序の冒頭で、古い時代の詩のなかでは杜甫の作品が特に好きだと述べ、さらに杜詩の用語の典拠を把握することの難しさに触れている。また続く記述からは、当時流布していた杜甫の詩集には脱落が多く、散逸していた詩を様々な機会に輯めることによって

クストが整理されていた状況を窺うこともできよう。王安石は杜詩の完全なテクストは自分の手によるものだと述べているが、不完全な形で伝来していた唐代の別集テクストを発見し、整理するという内容は、「記舊本韓集後」（居士外集卷二十三）に記された歐陽脩（一〇〇七）一〇七二）による韓愈文集の整理を想起させるものであり、いずれも北宋中期に唐代詩文のテクストが再発見され、整理されていた状況を背景としたものである。

また王安石がこの序文のなかで、作為的でない自然さという点に着目することによって、杜甫の詩を他の作者の作品から識別できると述べていることに注目したい。前章で見た『石林詩話』では、若年期の王安石の詩風の特徴を「少以意氣自許、故詩語惟其所向、不復更爲涵蓄。（少くして意氣を以て自ら許す、故に詩語は惟だ其の向かふ所のみにして、復た更に涵蓄を爲さず。）」また「皆直道其胸中事。（皆な直だに其の胸中の事を道ふ。）」と説明していたが、王安石自身がこの序文で杜詩の特色として挙げて「然每一篇出自自然、人知非人之所能爲而爲之、（然して毎に一篇の自然に出づるに、人は人の能く爲す所に非ずして之を爲すと知れば）」は、これと同傾向のものであろう。つまり、若年期の彼は、杜甫の技巧的でない自然さに詩の理想を見いだしていたのではないだろうか。

ところで北宋中期に杜甫の詩文テクストを整理したのは王安石だけではない。唐宋五代の動乱のなかで散逸したテクストが、当時再発見され、整理された様子が、蘇舜欽（一〇〇八）一〇四九）「題杜子美別集後」（蘇學士文集卷十三（四部叢刊本））に次のように記されている。

杜甫本傳云、「有集六十卷。」今所存者才二十卷、又未經學者編輯、古律錯亂、前後不倫。蓋不爲近世所尚、墜逸過半。吁、可痛悶也。

天聖末、昌黎韓綜官華下、於民間傳得號『杜工部別集』者、凡五百篇。予參以舊集、削其同者、餘三百篇。景祐、僑居長安、於王緯主簿處又獲一集。三本相從、復擇得八十餘首、皆豪邁哀頓、非昔之攻詩者所能依倚、以知亦出於斯人之胸中。念其亡去尚多、意必皆在人間、但不落好事家、未布耳。今以所得、雜錄成一策、題曰『老杜別集』、俟尋購僅足、當與舊本重編次之。

杜甫本傳に云ふ、「集六十卷有り」と。今存する所の者は才に二十卷、又た未だ學ぶ者の編輯を経ず、古律錯亂し、前後倫でをなさず。蓋し近世の尚ぶ所と爲らざれば、墜逸すること半ばを過ぎたり。吁、痛悶すべきなり。天聖末、昌黎の韓綜華下に官し民間に於いて『杜工部別集』と號する者を傳へ得、凡そ五百篇なり。予參するに舊集を以てし、其の同じき者を削り、三百篇を餘す。景祐、長安に僑居し、王緯主簿の處に於いて又た一集を獲たり。三本相ひ從へ、復た擇びて八十餘首を得、皆な豪邁哀頓し、昔の詩を攻むる者の能く依倚する所に非ず、以て亦た斯人の胸中より出づるを知れり。其の亡去せしもの尚ほ多きを念ふに、必ず皆な人間に在らんと意ふ、但だ好事家に落ちざれば、未だ布かざるのみ。今得し所を以て、雜録して一策を成し、題して『老杜別集』と曰ふ、尋購して僅かに足すを俟ちて、當に舊本と重編して之に次すべし。

ここで蘇舜欽は、近い過去に世間で貴ばれなかったため、『舊唐書』卷一百九十下文苑傳には六十卷と記されていた杜甫の詩文の三分の二が散逸し、二十卷の乱れたテクストが伝わるのみであった、と当時における杜甫詩文テクストの伝承状況を説明し、続いてその収集と復元の様子を述べている。それによると、まず韓綜（一〇〇九〜一〇五二）が仁宗天聖末年（十一年 一〇三二）に華下（現陝西省華縣）の民間から『杜

工部別集』五百篇を見出し、蘇舜欽自身が既存作品と対校した結果、三百篇が新発見のものだったという。さらに仁宗景祐年間（一〇三四〜一〇三八）に、長安の王緯主簿から蘇舜欽が異本を入手し、既存のテクストと対校した結果、八十余首を新たに発見し、そこで改めて『老杜別集』という名のテクストとして整理したとしている。この文の末尾には景祐三年（一〇三六）十二月十五日という日付が記されており、蘇舜欽らの努力による『老杜別集』が仁宗期に成立していたことがわかるが、さらに仁宗期には他に王洙（九九七〜一〇五七）らによって杜甫詩文の編年体テクストも編まれており、杜詩の再発見が盛んに進められていた様子を窺わせる。末尾に寶元二年（一〇三九）の日付を持つ王洙「分門集注杜工部詩序」（分門集注杜工部詩卷首）には、その経緯が次のように記されている。

甫集初六十卷、今秘府舊藏・通人家所有称大小集者、皆亡逸之餘、人自編摭、非當時第次矣。蒐衷中外書、凡九十九卷。除其重複、定取千四百有五篇、凡古詩三百九十有九、近體千有六、起太平時、終湖南所作、視居行之次、若歲時爲先後、分十八卷。又別錄賦筆雜著二十九篇爲二卷、合二十卷。意茲未可謂盡、他日有得、尚副益諸。寶元二年十月王原叔記。

甫の集 初め六十卷なり、今秘府の舊藏・通人家の有する所の大小集と称する者は、皆な亡逸の餘りにして、人自ら編摭し、當時の第次に非ず。中外の書を蒐衷するに、凡そ九十九卷なり。其の重複を除き、定めて千四百有五篇を取り、凡そ古詩三百九十有九、近體千有六、太平の時より起こし、湖南に作る所に終はり、居行の次を視、歲時に若ひて先後を爲し、十八卷に分かつ。又た別に賦筆雜著二十九篇を録して二卷と爲し、合せて二十卷なり。茲れ未だ盡くせ

りと謂ふべからず、他日得る有らば、尚ほ副へて諸を益さんと意ふ。寶元二年十月王原叔記。

王洙が編集したテクストは、既存の各種テクストを整理して詩十八卷、文二卷の全二十卷にまとめたものであり、編年体を導入していることが大きな特色である。先に挙げた蘇舜欽編のものは詩体別の編集であり、杜甫の集が編年体で編集されたのはこれが最初であると考えられる。またこの王洙編の二十卷本テクストは、後に補訂され、版本として刊行されたらしく、その経緯が王琪（生卒年未詳。治平二年（一〇六五）知揚州。）の「後記」（分門集注杜工部詩卷首）には次のように記されている。

近世學者、爭言杜詩、愛之深者、至剽掠句語、迨所用險字而模畫之、沛然自以絶洪流而窮深源矣。又人人購其亡逸、多或百餘篇、少或數十句、藏去矜大、復自以爲有得。翰林王君原叔、尤嗜其詩、家素畜先唐舊集、及採秘府名公之室。天下士人所有得者、悉編次之、事具于記、於是杜詩無遺矣。（中略）原叔雖自編次、余病其卷帙之多而未甚布。暇日與蘇州進士何君瑒・丁君脩、得原叔家藏及今古諸集、聚于郡齋而參考之、三月而後已。義有兼通者、亦存而不敢削、閱之者固有淺深也。而又吳江邑宰河東裴君煜取以覆視、乃益精密、遂鏤于板、庶廣其傳。（中略）原叔之文、今遷於卷首云。嘉祐四年四月望日、姑蘇郡守太原王琪後記。

近世の學者、争ひて杜詩を言ひ、之を愛づるの深き者は、句語を剽掠するに至り、用ふる所の險字に迫りては之を模畫し、沛然として自ら洪流を絶して深源を窮めんと以ふ。又た人人、其の亡逸を購ひ、多きは或ひは百餘篇、少きは或ひは數十句、藏去して大なるを矜り、復た自ら以て得る有りと爲す。翰林王君原叔、尤も其の詩を嗜み、家素と先唐の舊集を畜へ、秘府名公の室より採るに及ぶ。天下の

士人の得る有る所の者は、悉く之を編次し、事は記に具らかにし、是に於いて杜詩は遺る無からん。（中略）原叔自ら編次すると雖も、余は其の卷帙の多くして未だ甚だしくは布かざるを病む。暇日蘇州進士何君瑒・丁君脩と與に、原叔の家藏及び今古の諸集を得、郡齋に聚めて之を參考し、三月にして後已む。義に兼通する者有れば、亦た存して敢へて削らず、之を閲する者は固より淺深有るなり。而して又た吳江邑宰河東裴君煜取りて以て覆視し、乃ち益ます精密たり、遂に板に鏤し、其の傳を廣くせんことを庶ふ。（中略）原叔の文、今卷首に遷す。嘉祐四年四月望日、姑蘇郡守太原王琪後記。

ここで王洙の二十卷本は補訂をへて刊刻され、結果として後世の諸本の祖本となるに至るのだが、ここには旧来の抄本テクストが徐々に版本化されつつあった当時の書物をめぐる状況を窺うこともできよう。この王琪の「後記」に付された仁宗嘉祐四年（一〇五九）という日付は、既に見た諸例とともに、仁宗期における杜甫テクストの収集と整理の盛行を伝えるものだが、本章冒頭で見た、仁宗皇祐四年（一〇五二）の日付を持つ王安石「杜工部詩後集序」も、このテクストが当時のこのような流れの中で編まれたものであることを示しているだろう。

しかし王洙・王琪本が広く行われたのに比して、王安石が編んだ『杜工部詩後集』はそれほど流布しなかったようである。それでも郭知達（生卒年未詳）の撰した『九家集注杜詩』（淳熙八年（一一八一）序）の「九家」のなかには、この王洙、また『新唐書』卷二〇一文藝傳所収の杜甫伝の執筆者でもある宋祁（九九八―一〇六一）とともに王安石の名が挙げられており、南宋期に杜詩の注釈が整理される際には、先行注釈の一つとして組み入れられたと思われる。

さらに言うならば、仁宗期に整理されたのは杜甫の別集だけではなく、他にも様々な唐代の詩文テキストの収集、整理が進められたようである。例えば前章で登場した宋敏求は分門別の『李白集』三十巻を編集し、曾鞏（一〇一九〜一〇八三）がそれを編年体で改編している。また先にも触れたように、散逸していた韓愈の詩文テキストが歐陽脩によって収集校訂され、その後の彼による古文推進の契機となったことが、その「記舊本韓文後」の記述から読みとれることは言うまでもない。本章冒頭で見た「杜工部後集序」に記された王安石による散逸杜詩の収集と校訂は、北宋仁宗期に存在したこのような盛・中唐詩文再発見の動きのなかにある一つの事象であり、王安石の唐詩学習も、このような流れのなかにあるものとして捉える必要があるだろう。

宋初には西崑体と晚唐詩風の流行のもとで、杜甫及び盛・中唐期のテキストは散佚した状態にあり、当時においても杜詩の評価は概して高かったが、善本が伝わっていなかったために、人々はその詩作の全容を知ることができなかったと思われる。しかし本章で見えてきたように、仁宗期になると盛・中唐の詩文テキストの再発見が進み、テキストの再構成や校訂さらには注釈の努力が続けられた。それを担当したのは主に歐陽脩や王洙・宋祁らの世代だが、彼らよりもやや下の世代に当たる王安石も、その流れのなかで杜詩テキストの編集・注釈を試みたのである。前章で見た彼の二種の唐詩選集も、そのような唐詩再発見の流れの中に位置づけることができるだろう。仁宗期に諸人によって続けられたこれらの努力と、折しも成長しつつあった版本の普及の結果、次世代の人々はより容易に李・杜詩、また韓愈の詩文、さらに多くの唐代詩文作品の全体を目にすることができるようになり、その結果、それらの作品を作者の生涯の事跡と重ねて編年で排列し³⁾、より細やかな読みを試みる事が可

能になったのではないだろうか。

三 杜詩に対する評価

では王安石はどのように唐詩、特に杜甫の詩を学び、そのどのような点に魅力を感じていたのだろうか。次にこの点について、杜甫の肖像画に寄せた「杜甫畫像」詩（臨川集卷九）の内容に即して考えたい。なおこの作品は、劉氏・高氏『王安石詩文編年選釋』では「游宦鄆縣舒州時期」に分類され、さらに詩題に付された注釈では、先に挙げた皇祐四年の「老杜詩集後序」と同時期の作品ではないかと考察されている。長い詩なので三つに分けて検討していくことにする。

吾觀少陵詩 吾 少陵の詩を觀

謂與元氣侔 謂へらく 元氣と侔しと

力能排天幹九地 力は能く天を 排おしひき九地を幹し

壯顔毅色不可求 壯顔 毅色 求むべからず

浩蕩八極中 浩蕩たり 八極の中

生物豈不稠 生物 豈に稠ならざるや

醜妍巨細千萬殊 醜妍 巨細 千萬に殊なり

竟莫見以何雕鏤 竟に 見る莫し 何を以て雕鏤せしかを

まず冒頭から第八句目までの部分では、杜甫の詩人としての力量を取り上げて高く賞賛している。ここでは彼の力量は万物を生成する根源的な精氣と同等のものであり、天をおし開き大地を巡らせるものだとして評しているが、この「力能排天幹九地」という表現は、李壁注（卷十三）が指摘するように、韓愈「南山詩」（韓昌黎詩繫年集釋卷四）の「還疑造物意、固護蓄精祐。力雖能排幹、雷電法訶詬。（還た疑ふ造物の意、固

護して精祐を蓄はるか。力は能く排幹すと雖も、雷電怯えて訶詬す。」を踏まえているだろう。しかし「南山詩」の表現が山の形態を言うのに対して、ここでの王安石の表現は、詩人による詩作を造物者の働きに重ね合わせたものであり、「南山詩」のみならずより広範な中唐期の韓愈らに見られる一連の表現の影響を受け、これを継承したものと思われる。

またさらに言うならば、韓愈らの表現の先駆としての杜甫自身の題画詩、例えば「畫鵝行」（杜詩詳注卷六）の「乃知畫師妙、功刮造化窟。（乃ち知る畫師の妙の、功みに造化の窟を刮するを）」が、優れた画家の技術が対象の姿を巧みに造物者の岩屋から削り取ったとする表現等に直接に学んだ可能性もあるのではないだろうか。また、王安石は、杜甫が広い世界に満ちあふれている美醜・大小さまざまな数多の生きものの様態を描き分けることも評価しているが、このような自己を取り巻く外界に存在する様々な「もの」の有り様を凝視しようとする姿勢には、身辺の卑小な生物までも詩作の題材としようとした梅堯臣の態度や、邵雍の一連の觀物詩、さらにそれらを含んだ大きな流れとしての宋学的な発想との関わりを指摘できるのではないだろうか。

このように王安石は、杜甫の詩が有する森羅万象の様態を捉えさらにその生成の機微に踏み込んでいこうとする迫力を、とりわけ高く評価していたと思われるが、それをことさらに『詩經』の正統の継承としての詩の歴史の流れに位置づけることはしていないことに注意したい。杜詩にそのような位置づけを与えたのは中唐期において杜甫の評価を決定付けた元稹の「唐故工部員外郎杜君墓係銘并序」（元氏長慶集卷五十六）であり、この北宋中期においても他の人物による杜詩評は、しばしばこの元稹の表現を踏まえて展開されている。その一例として趙抃（一〇〇八〜一〇八四）「題杜子美書室」（清獻集卷三）を見てみよう。

直將騷雅鎮澆淫	直に騷雅を將て澆淫を鎮め
瓊貝千章照古今	瓊貝 千章 古今を照らす
天地不能籠大句	天地も大句を籠むる能はず
鬼神無處避幽吟	鬼神も幽吟を避くる處無し
幾逃兵火禍危極	幾たびか兵火を逃れて危極に羈し
欲厚民生意思深	民生に厚からんと欲して意思深し
茅屋一間遺像在	茅屋一間 遺像在り
有誰於世是知音	誰か世に於いて是れ知音なるもの有らんや

ここでは杜甫の詩を『楚辭』及び『詩經』大雅の正統を継承し、天地・鬼神を圧倒する偉大なものとして捉え、かつ杜甫が兵火に追われ、貧窮のなかに生きたが、世の中や人民を思う気持ちが強かったことを褒めている。他に孫僅（九六九〜一〇一七）「讀杜工部詩集序」（分門集注杜工部詩卷首）も、杜甫を六朝期からの華美に流れる詩風を变革し、周・楚・前漢に「相準」する詩風をうち立てた詩人と捉え、その詩風を天地の機密に触れる力強さを有すると評しており、この趙抃の詩の表現するところに近い。また孫僅のこの序では、中唐以降、杜甫の詩風が傾向ごとに孟郊・張籍・姚合・賈島・杜牧と薛能・陸龜蒙の六派に別れて継承されたと考えており、北宋期に唐代の詩風がどのように把握されていたかを窺うことができる。趙抃や孫僅に見られるこれらの表現からは、杜甫を『詩經』の正統を継承する歴代最高の詩人とする捉え方が、北宋仁宗期の士大夫層においてはある程度広まっていた様子を捉えることができようが、そのような状況を考えると、王安石がここでの杜詩評において『詩經』の正統の継承という点を示していないことは、むしろその特徴とすべき点と言うこともできるかもしれない。

では王安石「杜甫畫像詩」の続きの部分の検討に移りたい。

惜哉命之窮 惜しきかな 命の窮りて
顛倒不見収 顛倒するも 収められず

青衫老更斥 青衫 老いて更に斥けらる

餓走半九州 餓え走りて 九州に半ばす

瘦妻僵前子仆後 瘦妻は前に僵れ 子は後ろに仆る

攘攘盜賊森戈矛 攘攘たる盜賊 森たる戈矛

ここでは杜甫の不遇な人生の有様が、杜甫自身の詩の表現を拾い出して描かれている。李壁は引用部分第五句の「瘦妻僵前子仆後」について、「瘦妻」は「北征」（杜詩詳注卷五）の「瘦妻面復光、癡女頭自櫛。（瘦妻 面 復た光り、癡女 頭 自ら櫛げづる。）」を、「子仆」は同じく「自京赴奉先縣詠懷五百字」（同四）の「入門聞號咷、幼子餓已卒。（門に入りて號咷するを聞く、幼子餓えて已に卒すと。）」を踏まえると注しているが、この詩句は、杜甫のこれらの詩句に描かれた戦乱のなかで疲れきった妻子の姿のイメージを、どちらも「倒れる」という意味を持つ「僵」と「仆」とを重ねて用いることによって、一句内に端的に表現したものと考えることができよう。

これを受けた最後の部分は次のようにまとめられている。

吟哦當此時 吟哦して 此の時に當り

不廢朝廷憂 朝廷の憂を廢せず

常願天子聖 常に願ふ 天子の聖にして

大臣各伊周 大臣は各おの伊周たらんことを

寧令吾廬獨破受凍死 寧ろ吾が廬をして獨り破らしめ凍死を受けさ

しめよ

不忍四海寒颼颼 四海の寒くして颼颼たるに忍びず

傷屯悼屈止一身 屯を傷み屈せるを悼むは止だ一身のみ

嗟時之人死所羞 時の人の羞づる所に死ぬを嗟く
所以見公畫 所以 公の畫を見るに

再拜涕泗流 再拜し涕泗流る

推公之心古亦少 公の心を推すに古もまた少なし

願起公死從之游 願はくは公を死より起こし之に従ひて遊ばんこと

を

ここでは杜甫の詩作が万民の幸福を願う社会的な視点を持つことを取り上げ、個人的な悲しみや時代への憤りを述べるに止まる詩を超えるものとして高い評価を与えている。このような評価の視点は、濟世を重視する儒教的価値観から杜詩を評価しようとするものだが、同様の視点は先に挙げた趙抃の「題子美書室」詩の「幾逃兵火騫危極、欲厚民生意思深。（幾たびか兵火を逃れて危極に騫し、民生に厚からんと欲して意思深し。）」にも見ることができ、ともに儒教的倫理意識の強い北宋期の士大夫層において杜甫に対する評価が高まった一因を示唆するものである。南宋の人である李壁は、この詩の末尾に「公不喜李白詩、而推敬少陵如此、特以其一飯不忘君而志常在民也。（公の李白詩を喜ばず、而して少陵を推敬すること此の如くなるは、特に其の一飯にも君を忘れずして志は常に民に在るを以てなるのみ。）」という評を付しているが、王安石が李白詩よりも杜詩を好んだ理由をその社会に対する意識の高さに求めようとすると李壁自身の視点もまた、当時の儒教的倫理意識の強さを反映するものではないだろうか。

また末尾の部分は、作者が肖像を見ている場面を描き、「それで公の像を見ると、幾度も礼拝し涙が流れる。公の心を推し量れば、それは古えにさえ殆どなかったものであり、公を甦らせて後について遊びたいと願う。」と締めくくられている。作者はここで、彼が杜甫の詩に心を寄

せるのは、その言語表現としての面白さのみならず、そこに投影された杜甫という人の心に惹かれるからであると表明しているが、これも当時の士大夫層における、杜甫という人の生き方そのものに対する関心の高まりを反映したものであると思われる。つまり、王安石をはじめとする北宋期の士大夫たちにとっての杜詩愛好は、ただ単にその詩風を好むものではなく、詩に投影された杜甫という人物そのものへの憧憬による点が大きかったのではないだろうか。

四 唐詩学習のゆくえ

ところでこの詩の「寧令く」以下四句の表現は、劉氏・高氏『王安石詩文編年選釋』（三十四頁）にも指摘されているように、杜甫「茅屋爲秋風所破歌」（杜詩詳注卷十）の、

安得廣厦千萬間

安くんぞ廣厦の千萬間なるを得て

大庇天下寒士俱歡顏

大ひに天下の寒士を庇ひて歡顔を俱にせん

風雨不動安如山

風雨にも動かず 安きこと山の如し

嗚呼何時眼前突兀見此屋 嗚呼 何れの時にか眼前に突兀として此

の屋を見れば

吾廬獨破受凍死亦足 吾が廬 獨り破れ凍を受けて死すとも亦た足

れり

を受けたものであり、特に「寧令吾廬獨破受凍死」が杜甫の詩句を殆どそのまま襲ったものであることに注意したい。王安石の詩、ことに晩年の作品には、この他にも杜甫を初めとする先行詩人の詩句を一句を丸ごと、あるいはその一部の文字を換えて使用した例を見ることができ、陳師道が晩年の詩風を「工」と評していたこととの関わりを思わせ、彼の

作詩方法の特徴の一つとして指摘することができる。北宋期の詩作におけるこのような風潮については、先に挙げた王琪「後記」に、

近世學者、爭言杜詩、愛之深者、至剽掠句語、迨所用險字而模畫之、沛然自以絶洪流而窮深源矣。

近世の學者、争ひて杜詩を言ひ、之を愛するの深き者は、句語を剽掠するに至り、用ふる所の險字を迨びては之を模畫し、沛然として自ら以て洪流を絶して深源を窮めんとす。

と、当時、杜詩愛好者によって杜詩の詩句の剽窃が行われていたことが記されており、この王安石の詩句をその具体的な例と見ることができ。王安石が引用する先行詩句には様々なものがあるが、李白・杜甫・韓愈・李商隱・杜牧の詩句が多用される傾向があり、なかでも杜甫の詩句が群を抜いて多い。また白居易の詩句を引用することはまれである。王安石が杜甫詩を含む唐詩をどのように学習し、彼の詩作に取り入れているかについて考えるには、このような剽窃的な技巧についても検討しておく必要があるだろう。そこで最後に本章ではこの点について少し考察してみたい。

王安石が自作の詩のなかで先行作品の詩句を使用しているものの中には、これが古人の詩句の引用であることを詩中で明示している場合があり、「彎碣」（臨川集卷一・古詩）の次のような表現をその例として挙げる事ができる。

涼風過碧水 涼風 碧水を過ぎ

俯見遊魚食 俯きて遊魚の食するを見る

永懷少陵詩 永く懷ふ少陵の詩

菱葉淨如拭 菱葉 淨くして拭ふが如し

ここに引用した部分の「菱葉淨如拭」は、前句で「少陵詩」と明示し

ているように杜甫「漢波行」(杜詩詳注卷三)の「沈竿續縵深莫測、菱葉荷花淨如拭。(竿を沈め縵を續けるに深きこと測る莫く、菱葉荷花淨くして拭ふが如し。)」を五言につづめたものであり、ここで王安石は、自分の得た感興が杜甫の詩句に表現されたものとよく似ていることを喜んでいられると思われる。また同様の例は「寄正之」(臨川集卷七・古詩)の、次のような表現にも見ることが出来る。

少時已感韓子詩 少時 已に感ず 韓子の詩

東西南北俱欲往 東西南北 俱に往かんと欲すと

新年尤覺此語悲 新年 尤も此の語の悲しきを覺る

恨無羽翼超惚恍 恨むらくは 羽翼の惚恍を超越る無きを

引用した部分の二句目の表現は、やはり前句で「韓子」と明示されているように、韓愈「感春四首」其一(韓昌黎詩繫年集釋卷四)の、「東西南北皆欲往、千江隔兮萬山阻。(東西南北 皆な往かんと欲するに、千江隔てて萬山阻む。)」を用いたものであり、年少期から愛唱してきたこの詩句から受ける印象が、年を取って次第に変化してきたことを表現している。

しかしこのように古人の詩句の引用していることを詩中で明示する場合はむしろ少なく、ほとんどの場合古人の詩句の引用であることは明示されない。例えば「金山寺」詩(臨川集卷十五・五言律詩)の前半部分

重經高處寺 重ねて高處の寺を經

一與白雲親 一に白雲と親しむ

樹木有春意 樹木 春意有り

江山如故人 江山 故人の如し

の冒頭の二句は、李壁注(卷二十四)が指摘するように、白居易「登龍昌上寺望江南山懷錢舍人」(白居易集箋校卷十一)の「獨上高寺去、一

與白雲期。(獨り高寺に上りて去り、一に白雲と期す。)」を踏まえたものである。

またこのような詩句の剽窃的使用は唐代の作品からだけでなく、同時代人の作品からも行われている。「次韻和甫春日金陵登臺」(臨川集卷二十三・七言律詩)の前半部分、

鍾山漠漠水洄洄 鍾山は漠漠として水は洄洄たり

西有陵雲百尺臺 西に雲を陵ぐ百尺の臺有り

萬物已隨和氣動 萬物は已に和氣に隨ひて動き

一樽聊與故人來 一樽 聊か故人と與に來たる

は、李壁注(卷三十五)が指摘しているように、程顥(一〇三二—一〇八五)「遊月陂」(河南程氏文集卷三)の、

月陂堤上四徘徊 月陂堤上 四たび徘徊す

北有中天百尺臺 北に天に中る百尺の臺有り

萬物已隨秋氣改 萬物は已に秋氣に隨ひて改まり

一樽聊爲晚涼開 一樽 聊か晚涼の爲に開く

の表現をいくらか文字を入れ替えて、そのまま用いたものと考えてよいだろう。

さらに王安石は晩年、他人の詩の句を集めて一首の詩を構成する「集句」詩も制作しており、遊戯的な詩体ではあるものの、先行詩句の剽窃的使用を極限にまで進めたものと考えられる。一例として「懷元度四首」其二(臨川集卷三十六)を見てみよう。

舍南舍北皆春水 舍南 舍北 皆な春水

恰似葡萄初醱醅 恰も似たり 葡萄の初めて醱醅するに

不見秘書心若失 秘書に見はざれば 心は失へるが若く

百年多病獨登臺 百年 多病にして 獨り臺に登る

この詩の内容は、その場にはいない友人の蔡卞（字元度 一〇五八〜一一一七）に対して、王安石が水に囲まれた春の楼台の上で抱いた孤独感を告げたものと解することができるだろう。しかしこの詩の収められた『臨川先生文集』巻三十六は、他巻とは異なり「集句」のみを集めた部分であり、この詩も先行詩句をつなぎ合わせて構成されている。この詩の各句には、杜甫「客至」（杜詩詳注巻九）の「舍南舍北皆春水、但見羣鷗日日来。（舍南舍北皆春水、但見羣鷗の日日に來たるを見るのみ。）」、李白「襄陽歌」（李太白全集巻七）の「遙看漢水鴨頭綠、恰似葡萄初醱醅。（遙かに看る漢水の鴨頭緑、恰も似たり葡萄の初めて醱醅するに。）」、杜甫「別李秘書始興寺所居」（杜詩詳注巻十九）の「不見秘書心若失、及見秘書失心疾。（秘書に見はざれば心は失へるが若く、秘書に見ゆるに及べば心失ふこと疾し。）」、同「登高」（杜詩詳注巻二十）の「萬里悲秋常作客、百年多病獨登臺。（萬里秋を悲しみ常に客と作り、百年多病にして獨り臺に登る。）」が用いられており、杜甫と李白の詩句を綴り合わせて全体が構成されている。七言絶句の場合は起・承・結句に押韻するのが普通だが、この詩の押韻は承・結句（『平水韻』上平聲十灰）のみであり、完全な七言絶句にはなり得ていないと考えられるが、それでも一篇の詩としての一応の意味には矛盾するところ無く構成されている。

この『臨川先生文集』巻三十六及び三十七には、古詩・律詩を取り混ぜて三十六種六十八首もの集句詩が収められており、王安石が熱心にこのスタイルの詩作を試みた様子を窺わせる。それらの集句詩に引用される先行詩句には様々なものがあるが、李白・杜甫・韓愈・李商隱・杜牧の詩句が多用される傾向があり、句の剽窃的使用と同様である。この場合も、杜甫の詩句が多用され、「示蔡天啓三首」其^一のように五言八句が杜甫の詩句七句と韓愈の詩句一句から構成されている場合さえ存在し、

王安石の杜詩愛好の傍証とすることができる。

また自作詩への先行詩句の剽窃に話を戻すと、「次韻約之謝惠詩」（臨川集巻四）には次のような例を見ることがもできる。

開亭捐百金 亭を開きて百金を捐て
於此拂塵迹 此に於いて塵迹を拂ふ
地偏人罕至 地偏りて 人の至ること罕に
心遠境常寂 心遠くして 境は常に寂たり

この引用部分後半の「地偏人罕至、心遠境常寂。」の二句について、李壁注（巻五）は、陶淵明「飲酒二十首」其五の「心遠地自偏。」を表現の典拠として挙げ、さらに「公析而用之、似爲之疏解也。（公は析して之を用ひ、之の爲に疏解する似きなり。）」と評している。つまり李壁は、この二句の表現が陶淵明の原作の一句の含意を二句に分けて詳しく解き明かしたものになっていると指摘しているのである。このような原作詩句の細かな解釈を志向する表現は、作者が先人の詩の気分や内容を細かに味わおうとした結果、生み出されたものではないかと思われるが、王安石がここで試みている、古人の作品を味読することを通じて、詩句そのものの単なる借用や剽窃を超えた新しい表現を模索しようとする詩作の態度は、後に黃庭堅（一〇四五〜一一〇五）が唱え、また彼の詩風を継承した江西詩派の詩作態度ともなった、古人の詩文の表現に基づきつつ、これに創意を加えて新しい作品を生み出そうとする、所謂「奪胎換骨」的手法の先駆と考えることもできるのではないだろうか。

黃庭堅の詩のなかには、王安石の詩句を同様の手法で剽窃している例を見ることができ、王安石の剽窃的作詩技法に黃庭堅が関心を向けていたことを窺わせる。例えば黃庭堅「對酒歌答謝公靜」（宋黃文節公集外集巻六）の、大雪のために通行できず、昼間も城門が閉ざされたままで

あることを述べた、

南陽城邊雪三日 南陽城邊 雪 三日

愁陰不能分早白 愁陰 早と白と分くる能はず

摧輪踟躕沈數尺 摧輪 踟躕 沈むこと數尺

城門晝閉眠賈客 城門 晝に閉じて 賈客を眠らす

という表現は、王安石「久雨」(臨川集卷七)で城門が開いていても長雨のために通行できない様子を描いた、

羲和推車出不得 羲和 車を推すも出づるを得ず

河伯欲取山爲宮 河伯 山を取りて宮と爲さんと欲す

城門晝開眠百賈 城門 晝開くも百賈を眠らせ

飢孫得糟夜哺翁 飢えし孫は 糟を得 夜 翁に哺す

にヒントを得たものであろう。「久雨」詩に附された李壁注(卷九)は、ここでは王安石の表現の典拠を示すのではなく、黄庭堅の「城門晝閉眠賈客」という詩句を引き、「疑用公語。(疑ふらくは公の語を用ふるか。)」と評しているが、これは李壁が黄庭堅の詩に王安石の詩句に学ぶ表現が見られることに気付いていたことを示すものであろう。

まとめ

一世を風靡した西崑派の晩唐風の繊細さに馴染んでいた北宋中期の人々にとっては、新たに発見され再編集された杜甫詩・李白詩が表現する力強さや壮大さは新鮮なものと感じられたであろうし、また特に杜甫詩については、その社会に向けた視線や、儒教的な意識の表明が、当時の士大夫層の気風に合致したと思われる。その結果、杜甫詩の愛好者は増加し、西崑体とは志向を異にする盛・中唐期の文学の影響を強く受けた、

新しい宋詩の詩風が形成されていったのではないか。ちょうどそのような時期にあたる、晩年の王安石の剽窃的表現や集句制作は、彼が好んだ盛唐詩的詩風での詩作の実験でもあったのではないだろうか。

【注】

本稿ではテキストとして『臨川先生文集』(四部叢刊本)を使用し、『王荊公李壁注』上下(上海古籍出版社 一九九三年)を参照した。本文中ではそれぞれを『臨川集』『李壁注』と略称している。

(1) 宋敏求のものを含む北宋期の家蔵書の状態については、井上進氏『中国出版文化史』(名古屋大学出版会 二〇〇一年)第十章「特権としての書籍」宋代の蔵書事情(百七十二―百七十五頁)に詳しい。

(2) 南宋の陳善『捫虱新話』、陸游『老學菴筆記』、元の馬瑞臨『文獻通考』等。

(3) 宋代におけるこのような動きについては、浅見洋二氏「文学の歴史学―宋代における詩人年譜、編年詩文集、そして「詩史」説について―」(中国の文学史観 創文社 二〇〇二年)に詳しい。

(4) 中唐期における詩と造物の関わりについては、川合康三氏「詩は世界を創るか―中唐における詩と造物―」(中国文学報第四十四冊 一九九二年)を参照のこと。

(5) 蔡子勇成癖、能騎生馬駒。鋤鋒瑩鸚鵡、價重百碑碣。脱身事幽討、禪龕只晏如。劃然變軒昂、慎勿學歌舒。